"Something which resembles Plagiarism"—Poe と Hawthorne の関係

(Poe の 1842年の Hawthorne 論)

松 山 信 直

I はじめに

エドガー・アラン・ポーとナサニエル・ホーソーンは，アメリカのロマンチシズムを代表する短編小説を書いた。批評家でもあったポーは，ホーソーンの小説 *The Scarlet Letter* (1850年) が発表される前に死んだので，小説家としてのホーソーンを知らなかったが，1842年にホーソーンの短編集 *Twice-Told Tales* の第二版が出版されたとき，かなり好意的な書評[1] を書いて，次のような表現でホーソーンを非常に高く評価した。

> Mr. Hawthorne's distinctive trait is invention, creation, imagination, originality—a trait which, in the literature of fiction, is positively worth all the rest. . . . Mr. Hawthorne is original at *all* points.[2]

その後二人の間にかなり接近する機会が生まれたが，それは実を結ばず，色々な曲折を経て，1847年のポーのホーソーン論でポーはホーソーンをオリジナルでないと言って,[3] 二人の関係は断たれてしまった。

衆知のように，19世紀中葉のもう一人の作家ハーマン・メルヴィルが1850年に書いた『ホーソーンとその苔』("Hawthorne and His Mosses")[1] は，メルヴィルのアメリカ作家としての自己主張になると同時に，ホーソーン論の一つの原点になったかの感がある。そしてメルヴィルとホーソーンとの間

には，ある一時期，非常に親しい関係が生まれた。ポーのホーソーン論の場合はどうだったのだろうか。そして，この二人の関係はどうあったのだろうか。1842年に始まって1847年に終わる二人の関係には，ポーの研究家もホーソーンの研究家も従来あまり関心を向けなかった。そこで，比較的最近出版された資料[5]をふまえて，二人の関係に改めて検討を加えてみたい。この小論では，その第一段階として，二人の関係の出発点となるポーの1842年のホーソーン論をとりあげることにする。

II 1842年4月の短評

ポーは自ら短篇小説の作家として，ごく少数の例を除けば，アメリカでは優れた短篇小説は書かれていないと考えていたが（42/4, XI, 102），1942年早々にホーソーンの *Twice-Told Tales* の第二版が出版されると，早速，当時関係していた *Graham's Magazine* の4月号でこの作品を取り上げようとした。Robert D. Jacobs によれば，[6] 当時の雑誌は発行日の満一ケ月前に原稿を印刷屋に回さねばならなかったから，ポーは2月末に原稿を用意したが，それはごく短いものだった。

この4月号に掲げられた短い書評で，ポーは，短編小説には長所・利点があるが，このことをホーソーンの作品を例にとって論じようと考えていたところ，或る偶発的なことのため今月は手短にしなければならない，と言って，短く切り上げてしまい，次の5月号でかなりのスペースをさいて論評した。[7] つまり，ポーの1842年の書評は，4月と5月の二回に分けて発表されたのだった。

このことにはポーの妻の病気が関わっていた。ポーの若い妻 Virginia は，1842年の1月の中ごろに喀血した。恐らくその関係で，1月末締め切りで3月号に載ったロングフェローの *Ballads and Other Poems* の論評が短くなって，4月号に繰越して論じられることになり，[8] そのあおりで，ホーソーンの *Twice-Told Tales* 論は4月号で簡単にとりあげられ，5月号に繰越して

改めて論じられるようになった，というのが実情だろう。しかし，*Twice-Told Tales* の長い評論が一ケ月繰越した事は，後で触れるように，物理的な事情に依るとは言い切れないものがあった。

4月号におけるポーの短い評論の論点をまとめてみると，次の7点になる。

1）短篇小説（tale）は，散文によって最高の才能を発揮するジャンルと見做してきたが，小説，随筆，詩よりも利点がある。(XI, 102)

2）アメリカにはこれまで，短編小説の駄作は多くあったが，僅かな作品を除けば，芸術作品として吟味に耐えうるような作品はなかった。(XI, 102)

3）ホーソーンの書物は表題がおかしい。（初版で二度目の語りをしたのだから，今度は三度目の語り [thrice told] になるし，tales と言うものの，ここに収めた作品のほとんどは，正確に言えば，エッセイである)。(XI, 102-3)

4）表題のまずさはあるにしても，ここに収めた作品の幾つかに匹敵するような作品は，アメリカ人の手で書かれたことは無かった。(XI, 103)

5）個々の作品では，"The [A] Rill from the Town Pump" が人々に注目されてはいるが，賞賛に値しない。最も優れた作品は，"The Hollow of the Three Hills"; "The Minister's Black Veil"; "Wakefield"; "Mr. Higginbotham's Catastrophe"; "Fancy's Show-Box [*sic*]"; "Dr. Heidegger's Experiment"; "David Swan"; "The Wedding[-]Knell"; "The White Old Maid" である。(XI, 103)

6）スタイルは純粋そのものだ。トーンは絶妙に効果的でテーマと完全に一致する。だがテーマと人物に多様性が欠けている。出来事と思索の独創性は極めて顕著で，この特色だけでも，少なくとも我々の最も暖かい好意と賞賛に値する。だが，これは短編小説のことで，エッセイはさほど斬新ではない。(XI, 103-4)

7）全体として，ホーソーンは我が国が生んだ疑う余地のない数少ない天才の一人で，喜んで敬意を表したい。(XI, 104)

ポーはこのように，4月号の短評でいくつかの点を押さえて，極めて簡潔に，しかし，ホーソーンを非常に高く評価して，論じた。これに続く5月号の論評は，基本的には，この4月号の論評の主旨をふくらましたものだが，上の第一点を展開した短編小説についての一般論は非常に有名だし，幾つかの作品についてのコメントやエッセイについての論評にも，興味深いものがある。

ポーの短詩・短編小説論（42/5, XI, 106-9）は，自分が試みてきた短い作品の特色を初めて理論化したもので，西洋文学における最も初期の短編作品論になったが，ホーソーンの優れた作品の裏付を得た上でなされたということは，特記しておいてもよいだろう。さらに作品についての論旨には，例えば，"The Minister's Black Veil" の短評に見られるように，表面の物語と深層の意味の多重構造を指摘する，当時としては鋭い観察や（42/5, XI, 111），神秘的な超自然現象でも，"The Hollow of the Three Hills" の場合のように，魔法使いのなせる業という状況があれば納得し，"The White Old Maid" の場合のように，根拠が無い限りは否定することに見られる純理性の尊重など（42/5, XI, 111-112），興味のある特色があることは事実である。

しかし，この論評の優れた解説と批判は，すでに Jacobs の *Poe: Journalist & Critic* に於いてなされているうえ,[9] 紙数の関係もあるので，ポーとホーソーンの関係の上で重要だと思われる三点に焦点を絞りたい。その三点とは，4月号で全く軽く扱いながら5月号の論評で拡大された欠点（と思われること）の問題と，4月号の短評に無く5月号の論評で加えられた二つの事である。

Ⅲ　5月の評論の三つの論点

i　「多様性の欠如」

4月号のポーの論点の中で，ポーがホーソーンに見い出した唯一の反対すべき点は，第6点に含まれていた「テーマ・人物の多様性の欠如」(XI, 103) だった。この欠陥とは言わないまでも，不満に思うことを，5月号でポーはもう少し拡大し，控えめな言い方で次のように書いた。

> In the way of objection we have scarcely a word to say of these tales. There is, perhaps, a somewhat too general or prevalent *tone*—a tone of melancholy and mysticism. The subjects are insufficiently varied. There is not so much of *versatility* evinced as we might well be warranted in expecting from the high powers of Mr. Hawthorne. But beyond these trivial exceptions we have really none to make. (42/5, XI, 113)

要するに，憂鬱と神秘主義のトーンが行き亙り過ぎているということと，主題が偏り過ぎていて多様性に乏しく，多彩でないということの指摘である。しかしここでの表現が "trivial exceptions" とあるように，これらは非本質的なことと見なされ，あまり重要視されていない。ところが，この点はポーの後のホーソーン評でもっと厳しく，かつ，もっと拡大されて論じられることになる。[10]

ii　「ずうずうしい派閥」

4月号に言及が無く，5月号で取り上げられたことの一つは，具体的な作品論に入る直前に，次のような言葉で述べられた。

> We had supposed, with good reason for so supposing, that he had been thrust into his present position by one of the impudent *cliques* which beset our literature, and whose pretensions it is our full purpose to expose at the earliest opportunity; but we have

been most agreeably mistaken. (42/5, XI, 110)

ポーがここで「ずうずうしい派閥 (impudent *cliques*) の一つ」と呼んだのは，広く言えば，ニューイングランドの作家・知識人と思われる。具体的には，特にポーが優れた技巧を賞賛しながらも，道徳癖と模倣故に厳しく批判的だったロングフェローと，彼を中心とするボストンの作家達,[11] 或は，ポーが常に揶揄していたエマスン中心のトランセンデンタリスト達,[12] また，ポーが鋭い攻撃を止めなかった *North American Review*[13] とその寄稿者の作家や知識人達のことを指していると思われる。

1842年の評論までに，ポーがどれほどホーソーンのことを知っていたのか明らかでないが，ホーソーンは今上にあげた人々と，派閥を組むと形容されるような関係には無かったにしても，近かったことは事実である。ロングフェローとは大学の同窓だったし，1837年に *Twice-Told Tales* の初版が出版されたとき，ロングフェローは *North American Review* に匿名ではあったが，好意的な書評を寄せた。[14] 恐らくポーはこの初版の書評のことを，E. A. ダイキンク (Duyckinck) の *Arcturus* 3号 (1842年1月) に載ったホーソーン紹介の記事によって知ったに違い無い。ダイキンクはこの記事にロングフェローの1837年の書評を再録していたからである。[15] さらに，ロングフェローは *Twice-Told Tales* の1842年の第二版についても *North American Review* に書評を寄せている。[16]

ロングフェローは *Twice-Told Tales* の初版 (1837年) の書評で，ホーソーンの短編小説の中で "The Great Carbuncle" を「特に気に入った作品」と言い，"A Rill from the Town Pump" をスケッチの中で気に入った作品として全文を引用しているが,[17] ポーの書評では，前者は無視され，後者は4月号で，先に触れたようにわざわざ言及されて低く評価され，"The [A] Rill from the Town Pump" which, through the *ad captandum* nature of its title, has attracted more of public notice than any one other of Mr.

Hawthorne's compositions, is perhaps, the *least* meritorious. (42/4, XI, 103) とポーは言った。ポーは明らかにロングフェローの書評を意識していたように思える。

何れにせよ，ホーソーンが「ずうずうしい派閥」の一人ではないにしても，全く無関係とは言い切れないものがあったことは事実だし，また，ニューイングランド人を懐疑的に見るポーの意識の内に，ホーソーンも「ずうずうしい派閥」の一人で，慣れ合いで高く評価されてきたのではなかろうかという疑念がこびりついていたことも容易に想像できる。このポーの疑念の顕在化も，ホーソーンに対するポーの後の態度を彩ると考えられる。[18]

iii 「剽窃に似たこと」

4月号に無く，5月号の書評で取り上げられた第二点は，剽窃問題である。5月号の書評の終わり近くになって，ポーはホーソーンの "Howe's Masquerade" を取り上げ，"we observe something which resembles plagiarism—but which *may be* a very flattering coincidence of thought." (42/5, XI, 112) と言い，この作品の一部を引用して，1839年に出版された *The Gift* 誌の1840年号に載せた自分の作品 "William Wilson"[19] からの引用と並べ，類似点を指摘した。

ポーが引用した "Howe's Masquerade" の一節は，終わり近くのシーンである。アメリカ独立戦争当時，イギリス国王任命のマサチュセッツ州の総督 Howe は，独立軍に包囲されているボストンの絶望的な状況を隠すために，イギリスの士官達や英国派の人々を招いて華やかな仮装舞踏会を開いた。歓楽がたけなわになった時，屋外で葬式の音楽が鳴り，総督官邸の二階から，次々と植民地の歴代の総督の姿をした人物があらわれ，階段を降りて外の葬式に参列するかのように官邸を出ていく。ポーは，Howe が最後に降りてきた軍人外套に身を包んだ人物の正体を明かそうとした箇所を引用する。Howe は怒って剣を抜き，この人物に詰めよって，"Villan, unmuffle yourself." と叫ぶ。その人物は顔を隠していた外套のたれを下げる。その時，

ちらりと見えた相手の顔に Howe は非常に驚き，その人の前からたじたじと数歩退いて床の上に剣を落とす。（実はその人物は Howe 自身だったのである）。[20]

ポーがこの部分に並べたのは "William Wilson" の終り近くで，主人公の Wilson が第二の Wilson を刺し殺すシーンである。大学を飛び出して，各地で悪事を重ねてローマに来た Wilson が，仮装舞踏会で美しい公爵夫人に卑しい動機を抱いて近よろうとしたとき，以前に何度もあったように，第二の Wilson に遮られる。怒った Wilson は小さな控え室に第二の Wilson を連れこんで，剣を抜かせて戦わせ，何度となく胸を刺す。たまたまこの部屋の扉を開けようとする者があったので，Wilson は瀕死の相手からちょっと離れた。その一瞬眼を放した間に，（ここからポーは引用する）Wilson の見た目には，部屋の様子がすっかり変わって，部屋の奥に鏡が立っていて，血まみれになった自分がよろよろと近づくのが見えるように思えた。が，実は鏡などは無く，よろめいているのは断末魔の苦しみの中に立っている第二の Wilson だった。仮面とマントは床の上に落ちていた。[21]

ポーは両方の引用文の数箇所に下線を引いて，類似の表現を指摘し，「両者の一般的考えは同じだし，様々な類似の点が幾つかある」と言って（42/5, XI, 113)；それを列記した。1）各々のシーンに登場する相手は「見ている者の生霊もしくは生き写し」で，2）各々のシーンは「仮装舞踏会」で，3）各々の人物は「外套を着て」いて，4）それぞれ「喧嘩，つまり怒った言葉のやりとり」がある。更に，5）各々のシーンで「外套と剣が床に落ちる」。そして，6）ホーソーンの「悪党め，顔の覆いをとれ（Villan, unmuffle yourself)」[22] は "William Wilson" の或る箇所と "precisely paralleled" だと言う（42/5, XI, 113)。（ただし，この第6点はおかしい。ポーの作品には "scoundrel! imposter! accursed villan!" と罵る言葉はあるものの，ホーソーンの "unmuffle yourself" に相当するものは無い。[23]）

ポーは，先の引用に明らかなように，剽窃と断定している訳ではなく，

「何か剽窃に似たこと」とか，「偶然の一致かもしれない」という表現をとっているが，実はホーソーンの "Howe's Masquerade" の方は，"William Wilson" に先立って1838年の5月に *The Democratic Review* に発表されていた。Thomas O. Mabbott や Horace E. Thorner に依れば，ポーの "William Wilson" はワシントン・アーヴィングの1836年の "An Unwritten Drama of Lord Byron" (1836年の *Gift* 誌に掲載) に示唆を得て書いた作品であるとされているけれども,[24] 雑誌に作品を発表することに深い関心を寄せ，自ら雑誌の編集に携わることや書評に興味をもっていたポーが，当時の有名雑誌の一つ *The Democratic Review* に眼を通さない筈はなく，"Howe" を読んでいた可能性はかなり大きいと考えられる。つまり，ポーの "William Wilson" の物語りそのものはアーヴィングから示唆を得たにしても，ポーが指摘した様な細部の類似点を根拠に「何か剽窃に似たこと」があると決めつけることができるならば，ホーソーンの作品の方が先に出版されていたのだから，「何か剽窃に似たこと」を犯したのは，当然，ポーではなかろうかと疑われてしまう。

そのようなことにならない為には，まず第一に，ポーが自ら先にホーソーンの方に「何か剽窃に似たこと」があるのではないかと言う事が必要だろう。悪く言えば，自分の罪を相手になすりつける行為，或は，泥棒が自ら「泥棒だ！」と叫んで走ることによって，嫌疑を他の人にかぶせ，自分を被疑者からすりかえる行為，が必要だろう。然し，それにもまして必要なことは，ホーソーンの作品が先に出版されていたことを知らなかったと言い通すことだろう。John L. O'Sullivan が1837年10月から刊行した雑誌 *The Democratic Review* は，1838年の1月から定期的な月刊誌となった。[25] 先程述べたように，ポーがこの雑誌に眼を向けなかったとは到底考えられないが，ホーソーンの方に「何か剽窃に似たこと」があるという指摘を押し通すことによって，ホーソーンの作品を知らなかったという前提を守り通すことが出来る。ポーが1844年に *The Democratic Review* に掲げた "Marginalia"

の79でホーソーンを取り上げたとき，自分からホーソーンが剽窃を犯したように再度匂わせたのも，そのためだろう。[25] ことに先に触れたように，この雑誌の1839年5月号にホーソーンの "Howe's Masquerade" が掲げられていたのであるから，尚更である。

今日の我々の見方からすれば，ポーが例示したような「何か剽窃に似たこと」は，一笑に付して無視することもできるだろうし，せいぜい，示唆を得た，と言う程度のことではなかろうか。勿論ポー自身が言っているように「偶然の一致」と言うだけで済んでしまうかも知れない。そして今上に見てきたように，ポーの方が逆に「何か剽窃に似たこと」を犯したとしても，我々にとっては，そのこと自体はたいした問題ではないように思える。それにしても，ポーの「何か剽窃に似たこと」の指摘は，少なくともあまり文芸雑誌に詳しくない人には，「ホーソーンがポーから『剽窃に似たこと』をやったのか，それほどポーの作品は面白いのか，優れた描写をしているのか」と簡単に思わせてポーを持ち上げることには貢献したかもしれない。しかし，その一方で，文学に興味を持ち，文芸雑誌に関心を持っていた人には，ポーに対する「剽窃に似たこと」の嫌疑が起る前に，「"Howe's Masquerade" の方が先に出版されているではないか，ポーは *The Democratic Review* を読んでいなかったのか」と思わせてしまったとも考えられる。

だが，ポーの「何か剽窃に似たこと」の指摘には，「裏」があるように感じられる。事実，問題はホーソーンの "Howe's Masquerade" とポーの "William Wilson" だけのことではなかったのだった。

Ⅳ 文学的作為？

ポーの「何か剽窃に似たこと」を問題にした書評が載った1842年5月の *Graham's Magazine* には，ポーの "The Mask of the Red Death. A Fantasy"[27] も同時に載っていた。Robert Regan は1970年に，この作品がホーソーンの "Howe" のみならず，"Howe" の属している "Legends of

the Province House" のシリーズの他の作品，ことに "Lady Eleanore's Mantle" (*The Democratic Review*, III [Dec. 1838]) にも負うところが大きいことを指摘し，D. M. McKeithan も，1975年にこの問題を少し違う角度から論じた。[28] ポーの作品集を編纂して1978年に出版した Mabbott は "Masque" の典拠について，N. P. Willis の伝えたパリの1832年のコレラ騒ぎのときに開かれた仮装舞踏会の記事や，ボッカチオの『デカメロン』の物語がなされる状況（疫病を避けるために人々が遠い城に籠もった），その他，多くの研究者の示唆を掲げているが，1970年の Regan の論文や，1975年の McKeithan の論文には言及していない。[29]

先にも触れたが，Howe はボストンの危機的な状況を無視して仮装舞踏会を開いた。ポーの "Masque" でも Prince Prospero は領民の半分が疫病で死ぬという危機的な状況を無視して，華麗な仮装舞踏会を開く。そこへ，招かれていない正体不明の人物が登場する。その正体を知ったとき，Howe の剣は床に落ち，Prospero の抜き身の短剣はまっ黒な敷き物の上に落ちた。先に見たように，ポーがホーソーンの "Howe" と "William Wilson" の間の「何か剽窃に似たこと」を指摘したのと同じ言い方をして，ホーソーンの "Howe" とポーの "Masque" の間に見られる類似点を挙げていけば，恐らく十箇所以上の指摘が可能だろう。[30] またもう一つのホーソーンの "Lady Eleanore's Mantle" では，誇り高き Eleanore が舞踏会の最中に疫病のために倒れる。これもポーの Prospero が仮装舞踏会の最中に疫病のために倒れることにかぶさってくるし，この "Eleanore" と "Masque" の二作品の間に，さらに数多くの類似点を指摘することも，これまた可能だろう。それは，Regan や McKeithan や George D. Latimer がすでに行っているので，[31] ここでは繰り返さないが，明らかにポーは，先ほど引いた彼自身がホーソーンに用いた言葉を使うならば，ホーソーンの作品から「何か剽窃に似たこと」を行っていたことになる。

ポーがホーソーンから得たかも知れないような示唆（ここでは「剽窃」，

「剽窃に似たこと」，などの表現は敢えてとらない）の指摘は，他の作品についても言えるかもしれないが,[32] いまここで問題になるのは，次の様なことである。つまり，ポーがホーソーンに対して全く根拠の無い「剽窃」の嫌疑をかけたことの裏に潜んでいたのは，既に発表されていたホーソーンの "Lady Eleanore's Mantle" と "Howe's Masquerade" の二つの作品と，ホーソーン評が載った *Graham's Magazine* の1842年5月号に同時に載ったポーの "The Mask of the Red Death" との間にある，「何か剽窃に似た」様な関わりを隠すことではなかったか，と思われる。Regan が与えている説明の一つによれば,[33] ポーはこの当時自ら *Graham's Magazine* の編集に関わっていて，「ホーソーン論」でホーソーンの「何か剽窃に似た」行為を指摘して，そちらに読者の興味を引き付けておいて，ホーソーンからの「剽窃に似た」行為の嫌疑の濃い自分の "The Mask of the Red Death" を載せてしまったのだという。このどさくさまぎれ的な行為，という解釈を受け入れるならば，ポーが「ホーソーン論」を二分して，5月号に長いホーソーン論を掲げることにしたのは，先に述べたような，妻の病気の鍛寄せといった物理的な事情のためだけではなくて，編集に携わっていた特権を利用して読者の関心を操作した，という老獪な文学的作為の行為をやってのけた，ということになる。

ポーは書評や評論の中で，剽窃や模倣について異常な程に鋭く厳しく論評している。その例は枚挙にいとまがなく，Edd Winfield Parks は *Edgar Allan Poe as Literary Critic* の中で "Poe's obsession about plagiarism" とさえ言っているほどである。[34] そのポーが，彼の言う「剽窃」に問われるようなことを自ら犯していたとなると,[35] ポーを敵としていた人々の言い草 "a cheat, a thief, a scoundrel"[36] を認めざるを得ないようになってしまう。Regan はここでポーの "duplicity" という概念を導入して，次のように言う。

> His repeated denunciations of allegory when he was a confirmed and confessed allegorist and of plagiarism when he was himself a flagrantly public plagiarist demonstrate his penchant for duplicity.[37]

Regan が言及したアレゴリーの件は，後にポーのホーソーン評に再び絡んでくることなので，それは今さておくとして，他人の「何か剽窃に似た」行為を指摘しながら，自ら「何か剽窃に似た」行為をするというポーの "duplicity" は，批評家としてのポーと作家としてのポーの間の，非常に微妙な隔たりを示していると言えよう。

作家は決して真空状態のなかで生まれるのではなく，過去・現在の様々な作家の多様な作品に，反発したり，感動したり，多くの事を学んだり，多くの示唆を得たりして，自分独自の文学世界を創り上げていく。作家としてのポーとても，決して真空の中から生まれたのではなく，多くの作品から多くのことを学んだに違いない。その学んだことは，彼の言葉を使えば，"a portion of his own intellect" になり，そして "a secondary origination within his own soul" となって表に現れてくる。[38] ポーは自分自身の作品については，この考えを受け入れて，借用や剽窃を認めようとはせず，その一方で，他人の作品については，この考えを受け入れずに，剽窃や無断盗用を厳しく言い立てたように思える。

Regan の言うポーの "duplicity" を受け入れたにしても，ホーソーンの作品に関するポーの側の「何か剽窃に似たこと」の問題は，何もポーの作家としての姿勢を非難したり，ポーの作品の価値を低からしめるものではない。1842年にホーソーンに対して高い評価を下した批評家としてのポーの背後には，ホーソーンの作品から示唆を得て，自分独自の文学的才能を発揮して，ホーソーンの心理的・倫理的・形面上的な作品とは全く性格の違う作品を作った作家としてのポーがいたのだった。そのことをこそ評価すべきだろう。例えば，ホーソーンの "Eleanore" は，プライドがもたらした皮肉な結果から生まれる道徳的寓話性が非常に強いが，ポーの "Masque" はアラベス

ク風のホラー・ストーリーで，二人の作品の性格の違いを端的に表しているからである。ポーはポーらしい作品を書いたのに他ならない。

しかし，ポーとホーソーンの関係の観点から見れば，上に述べてきた様なポーの屈折した態度は非常に興味深い。ポーは，“William Wilson”を執筆したとき，この作品をアーヴィングに直接送って手紙を書き，アーヴィングの“An Unwritten Drama of Lord Byron”から示唆を得た旨を伝えたが，[39] ホーソーンに対しては，アーヴィングの場合と多少事情が異なる故もあったが，何も直接言わなかった。すでに見たように，ポーは逆に「何か剽窃に似たこと」の指摘を行う一方で，短編小説論を展開し，ホーソーンの作品を非常に高く評価して，その理論の裏付けとした。ホーソーンを高く評価したこと自体が，ホーソーンからある程度の示唆を得たことについての，ポーなりのホーソーンに対する“Acknowledgment”だったと考えることもできる。

しかし，作家としてのポーがホーソーンに直接“Acknowledgment”を述べず，逆に「何か剽窃に似た」行為をホーソーンにかぶせ，かつ，ホーソーンから示唆を得たと思われる可能性の高い“Masque”を，同じ雑誌に載せたことについて，ポーがホーソーンに意識的無意識的な負い目を感じたに違い無いことは否定できないのではなかろうか。それはともあれ，1842年のポーのホーソーン論は，ポーとホーソーンの関係から見れば，短編小説の一般論を展開したり，ホーソーンを高く評価したことの背後に，非常に屈折した姿勢が潜んでいるのである。この姿勢は，ポーがホーソーンに対する高い評価を続け，ホーソーンに接近しようとする態度になって現れてくるだけでなく，ホーソーンのポーに対する評価と絡んで，更に屈折したものになっていく。しかし，紙数も尽きたので，それについては稿を改めて論じたい。

注

1 *Twice-Told Tales* の第二版は，全2巻で，1837年の初版に収録しなかった作品と1837年以降に書いた作品を加えて，39の sketch と short story が収められた。ポー

の書評は *Graham's Magazine* の1842年4月と5月に掲載され，4月には "Twice-Told Tales. By Nathaniel Hawthorne. James Munroe & Co.: Boston." とされ，5月号では，"Twice-Told Tales. By Nathaniel Hawthorne. Two Volumes. James Munroe & Co.: Boston." となっている。(*The Complete Works of Edgar Allan Poe*, ed. James A. Harrison ["1902": New York: AMS Press, 1965], Vol. XI, pp. 102-104 and pp. 104-113).

2 Poe, *The Complete Works*, ed. Harrison, XI, 110. 以下，ポーの批評からの引用は Harrison 版に依り，巻数，頁数を本文中に示す。他の版に依る場合には，編者名を加える。*Twice-Told Tales* 評は，必要な場合に限り，1842年4月分は42/4，5月分は42/5，1847年11月分は47を巻頁の前に付す。

3 この評論は *Gordey's Lady's Book* の1847年11月号に掲載された。見出し（表題）は "Tale-Writing—Nathaniel Hawthorne.—Twice-Told Tales. By Nathaniel Hawthorne. James Munroe & Co., Boston. 1842.—Mosses from an Old Manse. By Nathaniel Hawthorne. Wiley & Putnam, New York. 1856 [sic]." となっている。(*The Complete Works*, ed. Harrison, Vol. XIII, pp. 141-155). ホーソーンがオリジナルでないとの発言は pp. 144, 154 に見える。

4 Herman Melville, *Literary World*, 17 and 24 August, 1850, in J. Donald Crowley ed., *Hawthorne: The Critical Heritage* (New York: Barnes & Noble, 1970), pp. 111-126.

5 例えば，ホーソーンの Centenary Edition の書簡集 (Vols. XV-XX [1984-88]) の出版や，B. R. Pollin 編の *Collected Writings of Edgar Allan Poe* (New York: Gordian Press, 1985) や "Library of America" 版の *Edgar Allan Poe: Essays and Reviews* (1984) の出版などがある。

6 Robert D. Jacobs, *Poe: Journalist & Critic* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, c1969), p. 292.

7 Cf. note 1.

8 Poe. XI, 64-68, 68-85.

9 Jacobs, pp. 317-328.

10 この問題は，次回に論じることになるが，ポーの論旨は，1844年12月の "Marginalia" 79, 1846年5月の "The Literati of New York City" の序文，および1847年の書評へと発展して，より厳しくなっていくとだけ言っておこう。

11 Cf. Sidney P. Moss, *Poe's Literary Battles: The Critic in the Context of His Literary Milieu* (Durham, N. C.: Duke Univ. Press, 1963), pp. 132-189.

12 Cf. Poe, XIII, 155; A. H. Quinn, *Edgar Allan Poe; A Critical Biography* (New

York: Appleton-Century-Crofts, Inc., 1941), p. 328.

13 Cf. Jacobs, p. 102 および Poe, XIII, 155.

14 *North American Review* 45 (July 1837) に掲載 (Crowley ed., *Hawthorne, The Critical Heritage*, pp. 55-59).

15 J. Donald Crowley, "Historical Commentary," in Nathaniel Hawthorne, *Twice-Told Tales*, "The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne" (Columbus: Ohio State Univ. Press, c1974), IX, 527. 以下 Centenary Ed. と略す。

16 *North American Review* 54 (April 1842) に掲載 (B. Bernard Cohen ed., *The Recognition of Nathaniel Hawthorne* [Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1969], pp. 9-12).

17 Crowley ed., *Hawthorne: The Critical Heritage*, p. 59.

18 Cf. Poe, 47, XIII, 155. この点も後に改めて論じることになるだろう。

19 Mabbott によれば，この作品は1840年向けの *Gift* 誌に掲げられた後，1839年10月の *Burton's Gentleman's Magazine* に再録され，1839年12月出版の *Tales of the Grotesque And Arabesque* に収められた。(Thomas Ollive Mabbott ed., *Collected Works of Edgar Allan Poe*, Vol. II, *Tales and Sketches, 1831-1842* (Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard University Press, 1978), p. 425. 以下，この版は Mabbott と略す)。

20 Hawthorne, Centenary Ed., IX, 253. Harrison 版に収めたポーの評論では，作品からの長い引用文は省略されている。

21 Poe, Mabbott, II, 447-8.

22 Hawthorne, Centenary Ed., IX, 253.

23 Poe, Mabbott, II, 447-8.

24 Poe, Mabbott, II, 422-425 & Horace E. Thorner, "Hawthorne, Poe, and A Literary Ghost," *NEQ* VII, 1 (March 1934), 153. さらに Thorner はこの物語の出所を Byron, Shelley, Calderon, Juan Perez de Montalvan, さらに17世紀のアイルランドの僧侶 Thomas Messingham にまで辿っている。(Thorner, pp. 147-150.)

25 Frank Luther Mott, *A History of American Magazines 1741-1859* (Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard University Press, 1966), pp. 678-79.

26 *The Democratic Review* (Dec. 1844), Pollin, Vol. 2, p. 181.

27 ポーは *Broadway Journal* 2 (19 July, 1845) にこの作品を再録したとき，表題を "The Masque of the Red Death" に変え，副題を削った。(Cf. Mabbott, II, 670). 以下この作品に言及する際には "Masque" と表記する。

28 Robert Regan, "Hawthorne's Plagiary; Poe's Duplicity," *NCF* 25, 3 (Dec. 1970), 281–298; D. M. McKeithan, "Poe and the Second Edition of Hawthorne's *Twice-Told Tales*," *The Nathaniel Hawthorne Journal 1974* (Englewood, Colo.: Microcard Editions Books, c1975), pp. 257–269.

29 Poe, Mabbott, II, 668–669.

30 Cf. Regan, p. 285

31 Cf. George D. Latimer, "The Tales of Poe and Hawthorne," *New England Magazine*, 30 (August, 1904), 692–703; also cf. note 28, Regan and McKeithan.

32 たとえば，McKeithan に依れば，1842年4月号の *Graham's Magazine* には後に "The Oval Portrait" と改題されたポーの "Life in Death" が収められていたが，これはホーソーンの "The Prophetic Pictures" (1837年の *Token* 誌に掲載) に非常に似ており (pp. 257–58), Seymour L. Gross は "Life in Death" が改訂され，改題されて，"The Oval Portrait" (*Broadway Journal*, April 26, 1845) として再発表されたのは，ホーソーンの "The Birthmark" (*Pioneer*, March 1843) に負うところが大きかったと述べている。(Gross, "Poe's Revision of 'The Oval Portrait'," *MLN*, 74 [1959], 20).

33 Regan, p. 292.

34 Edd Winfield Parks, *Edgar Allan Poe as Literary Critic* (Athens: University of Georgia Press, 1964). p. 72.

35 ポーが他人の剽窃・模倣を非常に厳しく非難しながらも，それに類する行為を自らよく犯していたことは，多くの論者が指摘している。(Cf. George Egon Hatvary, "Poe's Borrowings from H. B. Wallace," *AL* 38, 3 [Nov. 1966], 365–372, esp. 371; Daniel Hoffman, *Poe Poe Poe Poe Poe Poe Poe* [Garden City, N. Y.: Doubleday & Co., 1972], pp. 100–102, esp. p. 101.])

36 Regan, p. 292.

37 *Loc. cit.*

38 "Plagiarism—Imitation—Postscript to Mr. Poe's Reply to the Letter of Outis," *Broadway Journal*, April 5, 1845, *Edgar Allan Poe: Essays and Reviews* ["Library of America"], p. 759)

39 Poe, Mabbott, II, 422–23.

Synopsis

"Something which resembles Plagiarism": A Study of the Relationship between Poe and Hawthorne —Poe's Criticism of Hawthorne, 1842

Nobunao Matsuyama

With Poe's 1842 review of the second edition of Hawthorne's *Twice-Told Tales* began the Poe-Hawthorne relationship, which came to an end in 1847 with another of Poe's review of Hawthorne. However, to this relationship little attention has been paid in biographical-critical studies of the two authors. The present article deals with the initial stage of the Poe-Hawthorne relationship, i.e., with Poe's 1842 review published in the April and May issues of *Graham's Magazine*.

Famous as this review is for Poe's theory of short poems and short stories, and for Poe's high evaluation of Hawthorne's stories as well, its importance from our point of view lies in Poe's three contentions: 1) dissatisfaction with the "too general or prevalent tone" of melancholy and mysticism and with the lack of variation in subjects; 2) suspicion that Hawthorne might belong to "one of the impudent *cliques*" of New England authors led by Emerson and Longfellow whom Poe disliked; and 3) a charge against Hawthorne's plagiarism.

Poe evaluated Hawthorne very highly and held on to this attitude, but his dissatisfaction and suspicion were to grow larger and deeper

as Poe became more acquainted with Hawthorne's subsequent works which were later to be collected in *Mosses from an Old Manse.* Poe's charge of something like plagiarism—although Poe's phraseology is very subtle—was directed at Hawthorne's "Howe's Masquerade," in which, Poe contended, "there are various *points* of similarity" with Poe's "William Wilson."

However, Poe's charge is without foundation and this charge seems to have been intended to cover his own indebtedness to Hawthorne in his story of "The Masque of the Red Death," which appeared on the same issue of *Grahanm's Magazine* where Poe's review of *Twice-Told Tales* was published. Poe is famous for his severe attack on plagiarism as shown in "Longfellow War" but as far as his own practice is concerned he seems to have accepted his own theory of "a secondary origination within his own soul" and would not acknowledge indebtedness or borrowing.

Thus, Poe's 1842 review, which initiated the Poe-Hawthorne relationship, revealed layers of Poe's complicated attitudes toward Hawthorne and it was to be followed on one hand by Hawthorne's brief but bitter reference to Poe in "The Hall of Fantasy" and, on the other hand, by Poe's efforts to invite Hawthorne's contribution to his own prospective magazine. This and subsequent Poe-Hawthorne relationship will be discussed in my next article.